

## 4月5日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 マコ 15:1~39

### 1. マコ

w.4-5 「ピラトが再び尋問した。“何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。”しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったため、ピラトは不思議に思った。」

受難物語りの頂点であるイエスの逮捕から十字架上の死に至る部分で、それまでは多くを語ってきたイエスが、もはや何一つ主張も反論もせずに「屠り場に引かれる小羊のように……口を開かなかった」(イザ 53:7)という姿で、描かれていることに注目しましょう。

一看すると、この場面でいろいろな役を演じているのは人間たちだけであって、神も神の子も実際には登場していない……、ただの物言わぬ人形のようなイエスが滅多打ちにされている、そんな描写が貫かれています。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」(w.31-32)という言葉が、この事件が起こった世界を見事に表現しています。この世の知恵で見るとき、イエスの死はそのようなものでしかありませんでした(Ⅰコリ 1:21,2:8 参照)。

しかし使徒たちは十字架の出来事を、「神はキリストによって世を御自分と和解させ」(Ⅱコリ 5:19)、「永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12)と宣教したのです。イエスの受難と復活は神の御業であったからです。それはイエスの生涯の中での、単なる一事件のようなものではなくて、「まさにこの時のために」(ヨハ 12:27)「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハ 1:14)のです。

v.34 「三時にイエスは大声で叫ばれた。“エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。”これは、“わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか”という意味である。」

イエスはその死に際して 詩 22 の冒頭の句を口にされました。そして、「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥」(同 22:7)となって、「御自身を献げることによって」(ヘブ 7:27)、「永遠の贖いを成し遂げられ」(ヘブ 9:12)しました。

実にイエスの十字架の苦難と復活の勝利こそが、使徒たちが宣べ伝えた福音のすべてであり、神が教会に委ねられた「和解の言葉」(Ⅱコリ 5:19)であることを理解しましょう。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(Ⅰコリ 1:18)

### 2. フィリ

w.6-7 「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

「神の身分」「僕の身分」となっている語は、古くから「かたち(英 form 独 Gestalt)」と訳されてきました。その動詞形が、ガラ 4:19 では“形づくる”となっています。テキストをギリシア語で読んでも、日本語で読んでも、それだけで正しい意味が分かるわけではありません。すでに新約聖書が書かれた時代から、その解釈については論争がありました(1ヨハ 4:2-3)。イエスは神と等しい者ではなくて、神と人間との中間的な(一段低い)媒介者であると説明したり、あるいはイエスは神の化身であって、人間の仮の姿を一時的にまとただけであるということです。

451年の公会議が、そのような異端に対抗して宣言した“カルケドン信条”は、キリストの神人両性を等しく強調して、次のように宣言しました。“主は、真に神であり真に人であり給い、人間の魂と肉をとり、神性によれば御父と同質、人性によれば主は我らと同質、……。”

教会は、天に上げられた栄光のキリストを仰ぎますが、その方は「門の外で苦難に遭われた」(ヘブ 13:12)十字架のキリストであることを、私たちは決して忘れてはならないのです。

### 3. イザ

v.7 「わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っている。わたしが辱められることはない、と。」

罪と死からの救い、そして神との和解という福音は、ただ神の御業にのみ依存することであって、いささかも人間の能力や貢献にはよらないことを、聖書は語っています。受難物語りの頂点であるイエスの逮捕から十字架上の死に至る部分は、そのことを意図的に強調しているのです。

祭司長たちと議会も、ユダヤの群衆も、そしてローマの総督ピラトも、だれも“救い”を生み出すことは出来ませんでした。御子イエスは、この場面で彼らの行動を矯正しようとはなさいませんでした。“救い”は彼らの協力によってではなく、ただ御子が「十字架の死に至るまで従順」(フィリ 2:8)であることによってだけ、実現することを覚えておられました。

このキリストの永遠の贖いは、既に成し遂げられただけではなくて、現在も教会を通して生き活きと私たちに働いています。私たちは現在、原始教会の使徒たちや会衆と同じ救いに与っているのです。ですから、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり」(コロ 1:23)、今年も復活の祭儀に備えようではありませんか。

アーメン。

## 4月12日 復活の主日

使 10:34~43 コロ 3:1~4 ヨハ 20:1~9

### 1. ヨハ

v.8 「……見て、信じた。」

「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」(v.2)、「先に墓に着いたもう一人の弟子」(v.8)とは、このヨハネ福音書を書いた人のことです(21:24 参照)。彼は、その福音書を読んで信じるすべての人々を代表して、その信仰が歴史的事実の上に成り立っていることを、ここに宣言しました。

ですから私たちは、生まれて初めて聖書をこの ヨハ 20 章 から読み始める人のようにではなく、使徒たちが宣教したキリストの福音を、聖書を通して十分に聞いた者として、その理解の上に立ってこの弟子と一緒に“墓は空であった”という事実と直面して、“福音の事実”を信じようではありませんか。

その“福音の事実”とは、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)こと、「キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」(I コリ 15:3-4)、「神はキリストによって世を御自分に和解させ、…… 和解の言葉をわたしたちにゆだねられた」(II コリ 5:19)ということ です。

実際多くの人々が、この“福音の事実”に無知あるいは無関心なままで、福音書をただの小説か昔話のように読んでいます。私たちがいろいろな出版物で目にする復活節のメッセージの多くは、イエスの復活のおとぎ話でしかありません。使徒たちが伝えた“福音の事実”がほとんど無視されているのです。それではどうして、人々が福音を信じて救われるなどということが起こるのでしょうか。

v.9 「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

これは、“あのときは……”の話です。使徒たちは、“今は、もう理解している”からこそ、新約聖書の各書を“福音の証言”として書いたのです(I ヨハ 1:1 以下)。ですから私たちは新約聖書を、決して“まだ理解していない者”の側に立って読むではならないのです。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(使徒たちが証言した福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ 10:17)

### 2. コロ

“福音の事実”を理解しようと思うなら、先ず何よりも私たちは、イエス・キリストの十字架において顕された悪の力との戦いと、そして勝利に目を向けなければなりません。十字架は、悪魔の働きへの勝利(I ヨハ 3:8)でした。ですから、イエスの死を悲惨な殉教者の死のように思い描いてはなりません。

新約聖書は、イエスが十字架で勝利した敵を、罪、死、悪魔とその支配などと呼び(ガラ 1:4、II テモ

1:10、ヘブ 2:14 他)、さらに使徒パウロはこれらに律法を加えています(I コリ 15:56-57、ガラ 3:13)。私たちキリスト者が洗礼の秘蹟によって、罪に対して死に、今や新しい命に生きているということから離れて、聖書を中立的な立場で読むなどということは、無益なことです。現代の一般人の目線に立って聖書を学ぶ、などと言う人は、キリストの救いからいちばん遠い所にいることになります。

v.1 「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、……」

ですから使徒パウロは、「神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連らせ …… てくださいます」(II コリ 2:14)と言って、感謝しました。実に福音は、「命から命に至らせる香り」(I コリ 2:16)です。

vv.3-4 「あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

救いは神の業であって、これを人間が自らの努力によって理想の世界を創り出そうとする道徳主義や平和運動などと取り違えてはなりません。それは全く完全に、神の賜物であって(エフェ 2:8)、キリスト者はその完成の日を希望しつつ、「忍耐して待ち望むのです」(ロマ 8:25)。

### 3. 使

「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(v.42)キリストは、信じる者に罪の赦しをお与えになる救い主です(v.43)。

十字架の福音、罪の赦しの福音を、現代人には理解できない主題であると言って保留にするような、そんな聖書の読み方 …… では、決して“神のことばの食卓の富に与る”(典礼憲章 51)ことは出来ません。実際には、現代のカトリック信者の大部分がほとんど聖書を知らず、ただほんの一部を気まぐれにつまみ食いするようにしか読まないのが、結果として“福音を知らないで聖書を読む”ことになっているのです。

しかし、聖書は福音の証人(vv.39,41)である使徒たちの宣教を伝える書物です。これを熱心に読み、調べ、学ぶ信者になりましょう(使 17:11、II テモ 3:15)。そうすれば、あなたもキリストの復活の勝利に与ることが出来ます。そのような人々のために、聖書は復活節の喜びのあいさつを送っています。「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」(I コリ 15:57)

ハレルヤ、アーメン。

## 4月19日 復活節第2主日

使 4:32～35    Iヨハ 5:1～6    ヨハ 20:19～31

### 1. ヨハ

v.31 「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」

イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神のもとから聖霊が降って、教会の土台としての最初の使徒たちがたてられてから、教会は今日に至るまでその使徒の受けた務めを継承して歩んで来ました。

その使徒の務めとは、「すべての造られたものに福音を宣べ伝え」(マコ 16:15)、信じる者に「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」(マタ 28:19)で「永遠の命を得させる」(3:16)ことです。使徒パウロは、「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないこと」(II コリ 4:7)を力説していますが、ヨハネ福音書の復活物語りに登場する“ディディモと呼ばれるトマス”もまさにそのことの証人です。代々の教会は使徒継承というものをそのように理解し、トマスと共に「わたしの主、わたしの神よ」(v.28)と宣言して来ました。

最初の使徒たちは、復活されたイエスを見た人たちであり(使 1:22-26、Iコリ 9:1)、キリストと父である神によって(ガラ 1:1)、「神の福音のために選び出され、召され」(ロマ 1:1)ました。その意味で、使徒は一代限りの存在でありましたが、その使徒の受けた務めは今日に至るまでキリストの体である教会によって受け継がれて来ました。代々の教会は使徒たちの後継者である司教たちを任命するのが常でありましたが(使 14:23)、そのことによって教会は自らをキリストの福音にゆだねて歩んで来たのです(使 20:32、Iコリ 15:1)。

現代のカトリック教会は、“信じる者すべてに救いをもたらす福音”(ロマ 1:16)を宣べ伝えることを第一の課題としていると言えるでしょうか。教会は人々に“罪の赦し”と“永遠の命”を得させるといふ目的を最優先にしているのでしょうか。今朝の福音書のテキストを通して、神は問いかけておられます。

### 2. Iヨハ

v.1 「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」

よく知られている日本の聖歌に、“愛といつくしみのあるところ、神はそこにおられる”というのがありますが、これはキリストの福音を知らない人には誤解を与える危険性があります。なぜなら、聖書が語っている愛の掟の前提は、「神から生まれた者」だからです。この信仰の事実(ヨハ 3:3-8)から離れて、人間の美德として愛を考えてしまうと、もはや「天上のこと」(ヨハ 3:12-15)を信じるのが出来なくなります。

ミサの中の感謝の典礼で交わりの儀にあずかるのは、洗礼の秘蹟によって“新たに生まれた者たち”だ

けです。この交わりの儀こそが、なによりも先ず“互いに愛し合う”ことの第一の中心です。かつてはこれを個人的信心として追求し、聖体拝領と呼んでいた時代がありましたが、現代では交わりの儀と呼ばれるようになった意味を理解しましょう。

共にミサをささげる群れである教会は、“神が永遠の命を与えられた者たち(5:11)の交わり(1:3)”なのです。このことを理解しない群れは、ただの人間の集会でしかありません。

### 3. 使

原始教会の中でも特有な、エルサレム教会における“財産の共有”という現象は、実際にはごく短期間で消滅したようですが、それは純真な信仰から流れ出す兄弟愛の一つの現れでありました。この記録を根拠にして、原始キリスト教の運動を“貧しい人々との連帯運動”と見るのは、的外れな解釈です。

使徒言行録が伝えている大切な点は、この群れの中で使徒たちが、大いなる力をもって主イエスの復活を証していた(v.33)ということです。“財産の共有”という現象は、その結果であって、決してそれ自体が第一の目的、あるいは出発点ではありませんでした。換言すれば、彼らは使徒継承の信仰と並んで、もう一つの独特な主張を持っていた訳ではありませんでした。

キリストの福音、それも使徒たちが伝えた福音以外に、それに加えて何かその時代やその社会に特有な“ほかの福音”(ガラ 1:6-7)があるなどと、教会は考えないのです。教会が一・聖・公・使徒継承であるとは、そういう意味です。そうです。「信じてイエスの名により命を受けるため」に必要なものは、キリストの福音だけです。

現代のカトリック教会は、“信じる者すべてに救いをもたらす福音”(ロマ 1:16)を宣べ伝えることを第一の課題としていると言えるでしょうか。教会は人々に“罪の赦し”と“永遠の命”を得させるという目的を最優先にしているのでしょうか。先ず信者一人一人が悔い改めて、聖書から「神の偉大な業」(2:11)を聞く者になろうではありませんか。私たちがすべての人と、福音に共にあずかる者となるために(1コリ9:23)。

ハレルヤ、アーメン。

## 4月26日 復活節第3主日

使 3:13~19 Iヨハ 2:1~5a ルカ 24:35~48

### 1. ルカ

v.46-48 「次のように書いてある。“メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる”と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」

初代教会のケリュグマには、次の三つの主要な要素が含まれていたと考えられます。第一は“キリストが聖書に書いてある通り復活したこと”、第二は“キリストは生きている者と死んだ者との審判者に定められたこと”、そして第三は“信じるすべての者に罪の赦しを与える主となられたこと”です。審判者としてのキリストの再臨という終末論的背景の中で、初代教会はキリストの死と復活の事実を宣教したのであって、それ故にキリストの福音は十字架の福音であり、勝利の福音でありました。

ですから、福音が宣教されるところではどこでも、復活のイエスが語られた「あなたがたに平和があるように」(v.36)も、常に新しく伝えられたのです。平和は信じる者にキリストが与えてくださる賜物であって、代々の教会は使徒たちの宣教を通してこれを受けて来ました。

平和という言葉はしばしば聖書とは無関係に、心の中に宿る一つの精神的な状態と解釈されたり、あるいは人間の努力目標としての争いのない世界達成のことだと考えられて来ました。しかし聖書が語る平和は、キリストがその死と復活を通して贖われた民である教会に与えてくださったもので、「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(イザ 53:5)のです。キリストの復活なしには、私たちは今もなお罪の中にあり(1コリ 15:17)、神の怒りを受けるべき者であります(エフェ 2:3)。しかし、実にキリストは私たちの平和であり(エフェ 2:14)、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている(ロマ 5:1)のです。

聖書がミサの中で朗読される時、キリストは使徒たちの証言を通して、罪の赦しを得させる勝利の福音を(1コリ 15:56-57、Iヨハ 5:4-5)、神と和解させる平和の福音を(エフェ 2:16-17)、語ってくださいます。

### 2. Iヨハ

v.2 「この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。」

私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦された(エフェ 1:7)という事実の上に、共にミサをささげる民としての教会は成り立っています。それは信仰の事実ではありますが、決して現実とは無関係な心の中の“ただの宗教感情”のようなものではありません。

福音宣教の内容も、ただのキリストに関する美しい物語りではなくて、「わたしたちが聞いたもの、目で

見たもの、よく見て、手で触れたもの」(1:1)であり、現に教会と共にある事実です。ミサで聖書が朗読されるとき、いつもキリストはその救いをもって会衆に臨んでおられます。

そのような現実の上に、互いに神から生まれた者たちとして愛し合うということ(5:1-5)、すなわち神の掟を守る(v.3)、神の言葉を守る(v.5)ということが実現します。それは私たちのあらゆる理解を超えた神の偉大な業であって、「それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17)

### 3. 使

v.15 「神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたち(使徒たち)は、このことの証人です。」

私たちは聖書を通して、使徒たちが伝えたキリストの福音を聞くことができることを、感謝しましょう。新約聖書を、ナザレのイエスについての昔話として読む人は、そこからいろいろな美しい思想や、個人的な“イエス教”を導き出すかもしれません。しかし、新約聖書を使徒たちの宣教として聞き、聖書全体を神の大いなる救済史の証言として読む人は(ヘブ 1:1-2)、キリストの福音に出会うのです。

v.19 「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」

悔い改めるとは、もはやキリストの救いが必要でないような、そんな善人になりなさいという意味ではありません。そうではなくて、キリストに立ち帰り、キリストによって神との間に平和を得る(ロマ 5:1)ことです。復活されたキリストは今も、使徒たちが伝えた福音の宣教と、いつも共におられます(マタ 28:20)。

ハレルヤ、アーメン。